

秀賞

楽しいから出るエネルギー

青森県弘前市立第三中学校

1年 堤 佳吏

いつもの「楽しい」とは別の、感じたことのない「楽しさ」だった。心の底から湧き上がる「エネルギー」がそこにあった。

今年もまたピアノコンクールの季節がやってきた。ピアノコンクールは毎年出ているが、今年は出ないつもりでいた。むしろ出たくなかつたといった方がいいだろう。出ないことをなかなかピアノの先生に言い出せなかつた私は、「ピアノコンクール、今年も出るよね」という先生の言葉の圧に、「はい」としか言えなかつた。とたんにものすごい後悔が襲つてきた。いつも本番では緊張のあまり頭が真っ白になつた状態で弾き、結果、失敗に終わつてしまふ。というより本番の失敗をすべて「緊張していたから」の一言で済ませて逃げているのだ。そんな自分が嫌いだつた。

さらに、昨年のコンクールから、出る部門を一つ上のランクに上げなければならぬ。当然、曲の難易度も高くなる。ただでさえ中学校に入り、部活が忙しくなつて、ピアノの練習時間が短くなつてゐるのに……。本当にうんざりだつた。もともと少ないやる気とあるかなしかの自信がほぼゼロになつた。

コンクールでは課題曲が決められていて、その中から2曲弾かなくてはならない。今年の私の1曲目は、バッハの『シンフォニア1番』に、2曲目はドビュッシーの『ベルガマスク組曲～プレリュード』に決まつた。1曲目は3月あたりから練習してたし、曲もそんなに長くない。しかし、バッハは自分にとって大の苦手で、この曲に決まつたとき、練習してたにもかかわらずそんなに上手にもならない。いつも不満たらたらだつた。これを7月の本番までに仕上げなくてはならないのか。ドビュッシーは雰囲気が好きだったので、この曲に決まり少し嬉しかつた。でも楽譜を見たときから「絶対無理」としか思えなくなつた。とにかく曲が長く複雑で、暗譜すらできるのかと心に暗雲が覆つた。出ることに変わりはない。しぶしぶ譜読みから始めた。

譜読みを始めてから2週間。本番まであと1ヶ月だつた。普通なら焦らなければならぬ時期。でも、私はそんな焦りさえなかつた。別に金賞を目指しているわけでもないし……。自分の中では、ただ練習して、審査員やお客様の前で2曲弾いて、それで終了。それぐらいの気持ちだつた。

しかし、弾いているうちに自分の中で何かが変わつた気がした。本番まであと少ししかないので。最後までノーミスで弾けることすらできていないのに。

この2曲を弾くことが好きだと思うようになった。頑張ろうと、少しだがやる気が湧いた。

あつという間に本番1週間前になった。なかなか暗譜ができない。焦りに焦り、最後の追い込みで何とか間に合った。1曲目のバッハは前と比べたら上達していると思うし、先生にもほめられることが増えてきた。2曲目のドビュッシーも感情を込めて、余裕をもって弾けるようになった。最初はみんなに不安だった本番が少しだけ楽しみになった。

ついに本番当日。本番は夜なので、それまでリラックスして練習ができた。それでも会場に着いたら緊張はやってくる。震えが止まらなかった。舞台裏でも途中で間違えたらとマイナスの予想図が頭をよぎった。でも、「自分は大丈夫」「練習はやれるだけやった」と言いきかせた。やっと自分の番。椅子に浅めに座り、深呼吸。指が鍵盤に下りていく。

1曲目は少し速くなってしまったもののほとんどミスすることなく弾き終えた。続いて2曲目。とにかく練習の成果を見せよう、それだけだった。5分間、長いようで短い不思議な時間だった。1回も止まらず、しかもリラックスして弾けた。満足感と驚きが入り混じった「楽しさ」がそこにあった。

弾いているときに感じたある感情。それは心から楽しいという気持ち。今まで緊張する場で楽しいと感じたことは一度もなかった。

つまり、私自身が大きく変わったのだと思う。心から楽しいと思うことは自分を大きく成長させてくれた。コンクールを終えた今、何事も乗り越えたいという思いが強くなった。簡単には越えられないような壁が自分の中に新しくできたとき、ただ「頑張ればいい」だけでは何も変わらなかった。新しいことに挑戦したいという思いと、自分がもっているエネルギーが必要なのだ。コンクールでも「音楽が好き」という思いが、大きなエネルギーになった。

将来、音楽関係の仕事に就かなくても、この「好き」のエネルギーは絶対大事にしよう。未来を明るく、よりすてきなものにするために。